

■七月一日放送(第十四回)

「奥州斯波氏(おつしゅうしば)」

福井商工会議所 事務局次長 奥山 秀範

室町期に越前の守護を務めていたのは、当時「第一の家格」を誇った斯波氏で、その名は「奥州斯波郡」に由来している。

話は鎌倉初期に戻るが、文治五年七月、源頼朝は奥州平泉制圧に向け出陣した。義経亡き平泉攻略にこれほどの軍勢がいるのか思えるほど、一大兵力を動員しての出陣であった。八月、鎌倉軍は奥羽軍の防衛部隊と戦を交え、これを破り平泉を占領したが、頼朝はさらに北上をつづけ、斯波郡陣ヶ岡に全軍を終結させた。

斯波郡、かつて征夷大將軍坂上田村麻呂が東北制圧の拠点とした場所、源頼義、義家親子が「前九年の役」で前進基地とした場所、いわば武門の棟梁ゆかりの地、源氏の聖地ともいべき地に全軍二十八万を集め、閥兵し、論功行賞を行なった。あたかもそのことが目的であったかのよう



に。時が流れ、源氏の正統が絶えた時、奥州斯波郡は足利氏の支配するところとなっていたが、足利泰氏の代に北条得宗と対立する名越流北条氏の娘との間に家氏をもうけ、得宗家との関係は一時緊張する。しかし、得宗家の巻き返しを受け入れ、得宗家から妻を娶り三男頼氏を

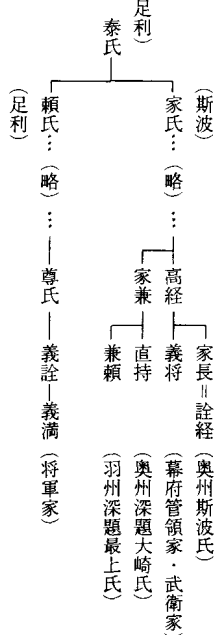
設け、家督はこの弟頼氏につがせたものの、「聖地」奥州斯波郡は家氏に分知した。こうした経緯もあり家氏を祖とする斯波氏は足利一門の中で特別な「家格」を保持することになったのである。

鎌倉幕府が倒れ、建武の新政がはじまると、後醍醐帝は、関東を牽制し東北支配を強めるため北畠顕家を陸奥の守に任じ、顕家は義良親王(後の後村上天皇)を奉じ奥州に下向して多賀城に入った。

宮廷のホープ顕家が奥州支配を固めることは、足利尊氏にとつて大きな脅威であったが、これに対抗するためには顕家に対抗できるだけの権威が必要であった。このため斯波郡を支配し一門最高の家格を誇る斯波高経(越前守護)の嫡男家長に「陸奥の守(奥州管領)」として奥州下向を要請した。こうして顕家、家長というともに十代の若武者を大将とする抗争の幕が切つて落とされたのである。

今回は斯波家長と奥州斯波氏(斯波御所)の動向を中心に越前との交流にも触れてみたい。

足利斯波略系図



講師略歴：奥山 秀範(おくやま・ひでのり)

昭和二十七年一月丹生郡越前町生まれ。昭和四十九年立命館大学卒業、昭和四十九年福井商工会議所に入所、中小企業の経営相談、情報化支援に従事。業務課長補佐、金融課長、総務課長、商工相談所長を経て平成十三年四月より現職。